

<書評>中谷功治著 『テマ反乱とビザンツ帝国 - コンスタンティノープル政府と地方軍団』 (大阪大学出版会、2016年3月、xxii + 430頁、6,900 円)

著者	貝原 哲生
雑誌名	関学西洋史論集
号	40
ページ	47-49
発行年	2017-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027656

[書 評]

中谷 功治 著

『テマ反乱とビザンツ帝国
ーコンスタンティノーブル政府と地方軍団』

(大阪大学出版会、2016年3月、xxii+430頁、6,900円)

貝 原 哲 生

本書の目的は、中期ビザンツ帝国の前半、7世紀から9世紀における政治プロセスをテマとの関係から考察することにある。ビザンツ史において一般にテマ制と呼ばれる軍事・行政制度、とりわけその起源に関する研究は史料不足から長い停滞期にある。しかし、著者は、より長いスパンで時代の趨勢の把握に努めるという立場から限られた利用可能な史料を見直し、具体的なテマ軍団の活動を通じてテマ制の成立過程の解明に取り組んでいる。以下、手短に本書の内容を紹介する。

序章で論点整理がなされた後、第1章では、後期ローマ帝国の軍事制度からテマ軍団誕生の経緯をたどるとともに、テマ軍団による反乱全体を概観し、「テマ軍団の将兵が自分たちの将軍や軍団の要職にある者を皇帝に擁立し、首都コンスタンティノーブルへと攻め上る」ケースを「テマ反乱」と定義する。そして、7世紀中盤から9世紀初頭を「テマ反乱の時代」と位置づけ、「8世紀のレオン3世・コンスタンティノス5世・レオン4世の治世には、小アジアを中心とするテマ諸軍団が政権を支えていた」、「エイレネの摂政期からニケフォロス1世・ミカエル1世の治世には、それらテマ軍団の勢力に対する中央政府側からの巻き返しがあった」という2つの仮説が提示される。

第2、3章は、帝国政治の舞台でしばしば重要な役割を演じた元老院と艦隊に関する考察にあてられており、7世紀に活発だった元老院の活動は8世紀に

低調となるが、それは同時期におけるテマ軍団優位の状況を反映していること、また艦隊にとっても7世紀末から8世紀初頭は注目に値する時期ではなかったことが論じられる。

第4、5章では、本書における仮説を立証するため、レオン3世とエイレネ各々の政権とテマ軍団との関係を考察している。そして、8世紀初頭のレオン3世政権は対外危機に対処すべく小アジアを中心とするテマを結集した軍事政権であり、祖国防衛のための非常態勢はコンスタンティノス5世やレオン4世に受け継がれたこと、反対に、8世紀後半のエイレネ摂政・女帝期には政権が安定するとともに対外情勢が好転したことで地方のテマ軍団の統制が可能となり、首都を中心とした中央の地位が相対的に回復、さらに政府高官から帝位に登ったニケフォロス1世により強化されたことを指摘する。

第6章では、従来は地方のテマ軍団に対抗するために8世紀中頃に創設された中央の戦力と考えられてきたタグマについて、コンスタンティノス5世からエイレネ、ニケフォロス1世と諸皇帝の下で創設・改編がなされるにつれ、元々は皇帝の親衛隊と呼べる代物であったそれが、次第に首都近郊に駐在する軍事力として精鋭の騎兵連隊を形成していったと論じている。

第7章は、イサウリア朝期の首都における陰謀事件の発生傾向から、「テマに支えられた政権」仮説の裏付けを試みている。

ニケフォロス1世の戦死を手がかりに8世紀から9世紀におけるビザンツ帝国のバルカン政策を再考する第8章では、直接軍隊を率いて遠征し、おもにブルガリアと対決する皇帝と、都市の確保や再建を主目的として、おもにスラヴ人の住む地域の回復につとめる皇帝という2つの異なる傾向が存在すること、また、互いに連関するこれらの傾向は皇帝個人の志向以上に帝国が置かれた各時期の状況に規定されるものであったことが示される。

第9章は、9世紀20年代のスラヴ人トマスによる大反乱を同時代の他の反乱との類似性に着目して再考し、これを「テマ反乱」の一つに位置づけている。そして、トマスの乱の鎮圧をもって「テマ反乱の時代」は終焉を迎えるとする。

第10章では、先立つ各章の議論を前提に、テマ制が成立する上での画期として695年以降7回にわたって篡奪が繰り返された「内乱の20年」（とくにその後半）の間が提示される。この時期に首都の地方に対する統制力が弛緩したことで、テマ將軍は事実上の軍民両権を掌握した。そして、ほぼ毎年のように繰り返されるイスラーム軍の小アジア侵攻により、この異常事態は継続されることとなった。このようにしてテマ制は形成されたという。

全十章での考察を踏まえた展望として終章は、8世紀以降のテマ反乱には主導権がテマ將軍ではなく將兵にあったと考えられる事例がいくつか存在したこと、そして、テマの將兵は基本的に現地徴募であったがゆえに、反乱を引き起こす將兵の意向とは小アジアの住民の意向でもあった可能性に言及する。

本書は、テマの成立や発展を特定の皇帝の改革に帰する姿勢を否定し、漸次的な過程としてレオン3世以降の「小アジアのテマ軍団に支えられた政權」が8世紀末のエイレネ政權以後揺らぎ、姿を消すまでを描き出した力作であり、テマ制の起源論争に正面から挑んだことも大いに評価されるべきである。

その一方、今後の展望ではテマ反乱が持つ地域の反乱としての側面を強調しているが、そうであるならば、テマの將兵が自分たちの指揮者を皇帝として歓呼し、首都コンスタンティノーブルを目指し進軍する理由について説明する必要があるだろう。また著者も述べているように、本書の主張は史料不足を推測で補っている面がしばしば見受けられる。だがこの点については、印章資料や考古資料あるいは非ラテン・ギリシア系の記述史料と比較対照することで、より精度の高いものとなっていくのではないだろうか。